20世紀初頭・函館の建築の史的探求

—明治40（1907）年大火の復興を巡って—

川　島　智　生

Historical Exploration of Architecture in Hakodate at the Beginning of the 20th Century

—The Revival from the 1907 Conflagration—

KAWASHIMA Tomoo

Abstract

Hakodate was rebuilt in several years, even though the majority had been burnt down in the conflagration in 1907. The main reason for its quick recovery was that Hakodate, at that time, was a big and eminent city with strong financial power.

There were three reasons for the conflagration. First, the city was geographically exposed to strong wind. Second, the houses were made of wooden material. Third, the citizens did not plan to live there for an extended period.

Because Hakodate was a town run by private initiatives, the main public buildings were constructed with millionaires' contributions. Reflecting such tendencies, it is confirmed that the designs of the buildings in Hakodate had been planned by local architects.

In this paper, the mode of the constructions before the conflagration and how it had changed since the conflagration are observed. Wood siding boards had been used before the conflagration, while, after it, timber-framed plastering started to take its place. The use of brick masonry increased as well.

The Hakodate ward office and the Hakodate hospital were looked at as the examples of the construction before the conflagration, while the public hall and the Teikokuhakuhinkan were architecturally analyzed as the examples after the conflagration.

A lot of carpenter chiefs and workmen, etc. from the whole country gathered in Hakodate after the conflagration.

キーワード：大火、復興建築、木造洋館、耐火建築、観光資源

Key words: Conflagration, Revival architecture, Wooden European-style architecture, Fireproof building, Tourist resources

---

京都華頂大学現代家政学部教授

連絡先：川島智生　京都華頂大学現代家政学部

ku018kawashima@kyotokacho-u.ac.jp

序—21世紀初頭の現在から20世紀初頭の函館へ

現在の函館の都市イメージとはいったいどういうものなのか。人によって様々な見方はあるだろうが、坂のある異国情緒溢れる北の港町という印象は多くの日本人が抱くイメージだろう。

歴史的にみれば、松前藩の港町「箱館」が幕末に横浜・長崎とともに開港都市のひとつに選ばれた時点で、その後の函館という都市の性格がある意味では決定されたものと思われる。実際に居留地がつくられ、そこにはイギリス・ロシア・アメリカの領事館が軒を並べる。明治に入ると国際的な貿易港へと発展する。大正昭和戦前期は東京以北の最大規模の大都市になった。戦後は北洋漁業・青函連絡船といった港湾都市を支えた機能が消滅したことで経済的には停滞するものの、一方で観光都市化が進展し、歴史的な洋風建築が数多くある港町として全国的に定着する。

地理的にみれば、函館は三方を海に囲われ、「陸繋島と対岸の劇場的地形によって成り立っている」[1]町である。明治期には「巴字形の水と臥牛形の山より成立てる」[2]と称された。図1に見て取れるように、臥牛形の陸繋島である函館山の内側の港がこの町の出発点であり、急成長した都市の拡大が市街を砂州に滲み出させた。幅1kmに満たない砂州がかろうじてこの島を北海道の大地と結びつける。この地勢ゆえに強風が町を吹き渡る。このような地形は世界遺産に登録されたフランスのモン・サン・ミッシェル[3]にも通ずる要素があるが、函館はひとつの修道院ではなく、三十万の市民が生きる都市である。

風の町函館は明治以降、何度も大火によって焼かれ、その都度建物は変貌を遂げ、市街地の景観は変わった。とりわけ致命的な大火とは、西部を焼いた明治40（1907）年、中央部に起き

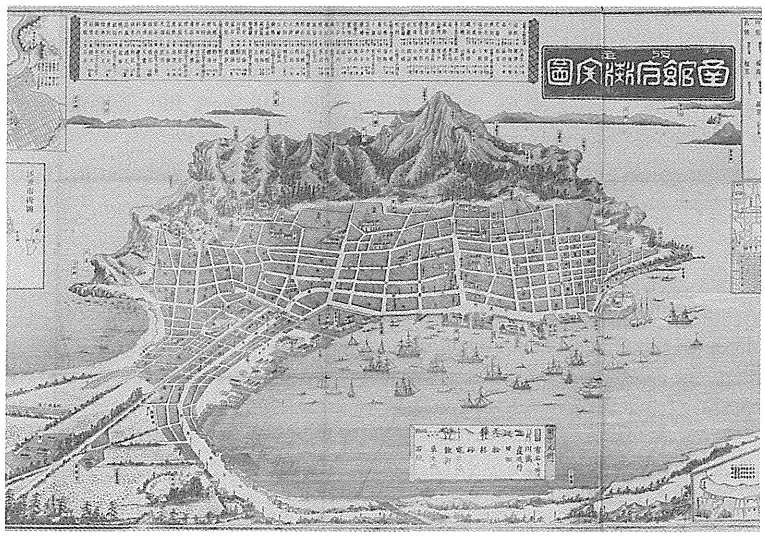

図1　函館市外全図（明治21年）

た大正10（1921）年、中央部と東部を焼き尽くした昭和９（1934）年の３つが揚げられる。火災ごとに焼失地域は異なるが重なり合う地域も多く、いわば10数年ごとに市街地の刷新を余儀なくされた一面があった。そのことは時代の特徴が建物に、都市景観に刻印された町をつくりだしたとも捉えられ。だが、この100年間変わらなかったものたちがあった。

それはこの地勢の行き詰まり、現在では西部地区と呼ばれる函館山の麓と海岸際に残る一群の建造物である。その過半は明治40（1907）年の大火の直後に建てられたもので、その時期、函館は全国有数の大都市として栄え、都市として最も慇懃を極めた。そのような財力を背景にして、幾つもの名建築がつくられていった。ハリストス正教会をはじめ、旧函館区公会堂、東本願寺別院、旧函館郵便局、海岸の煉瓦倉庫などの建物が該当する。それらは急傾斜の地形と巴港と呼ばれた地勢と相俟って、函館独自の景観を形づくる。

このような景観は長崎をはじめとする他の開港都市にもみられるものだが、函館西部地区はこれらの建物が建設された時期を境に寂れる。函館の中心は中央部や東部に移り、西部は半ば時代から取り残される。また西部だけが昭和９（1934）年の大火からも逃れ得た。そのために往時の建築様態を比較的よく留めることになる。つまりここでは、百年前の20世紀初頭の世界に出会うことができるのだ。観光客を魅了する事由である。

けれど、21世紀初頭の現在、函館の観光地としての特権的な立場が揺らぎはじめ、そのイメージに少し翳りが出はじめている。そのことは映画『海炭都市叙景』[4]で演じられ、芥川賞受賞作『海峡の光』[5]でも描かれた。すなわちあらためて、函館独自のアイデンティティが問われている。本研究ではこのような景観を形成する建築を解明することで、都市函館の特性を浮彫にし、ひいてはそのアイデンティティの意味を探っていく試みである。

単体としての研究は文化財指定された建物に限って解体修理時に行われている[6]が、全体像の位置付けについては先行する研究[7]は少なく、それらの建築的な意義が十分に論じられたとは言い難い。筆者は明治40（1907）年の大火に続く大正10（1921）年の大火後の復興建築については、『耐火都市の建築思想１―鉄筋コンクリート建築の先駆都市・近代函館の位相』[8]として既にまとめている。本研究は大火と建築・都市の関係を建築史学の観点から研究する一環にある。昭和９（1934）の大火については次稿で予定している。

1　明治40（1907）年の大火

今から103年前の函館で大火があった。明治40（1907）年８月25日夜10時20分に、東川町217番地の石鹸製造所から出火し、瞬く間に火は広がり一晩燃え続け、焼失区域は40余万坪に及んだ。焼失町20ヶ町、焼失戸数は12,789[9]戸、罹災人口は32,428人、損害金額は31,148,137円、死者は８人だった。「同市の約七分を焼払い」[10]とあり、焼失区域を記した地図（図２）からは、ほぼ市域のほとんどが焼失したことがわかる。当然主だった建物の過半は焼失した。そのために新規に建て直されることになる。現在の函館観光の中心地である西部地区の主要な建物の出発点はここに遡ることができる。

当時函館市の人口は87,298人だから、およそ３人に１人が被災したことがわかる。その様子は『函館大火史』[11]によれば次のようなものだった。

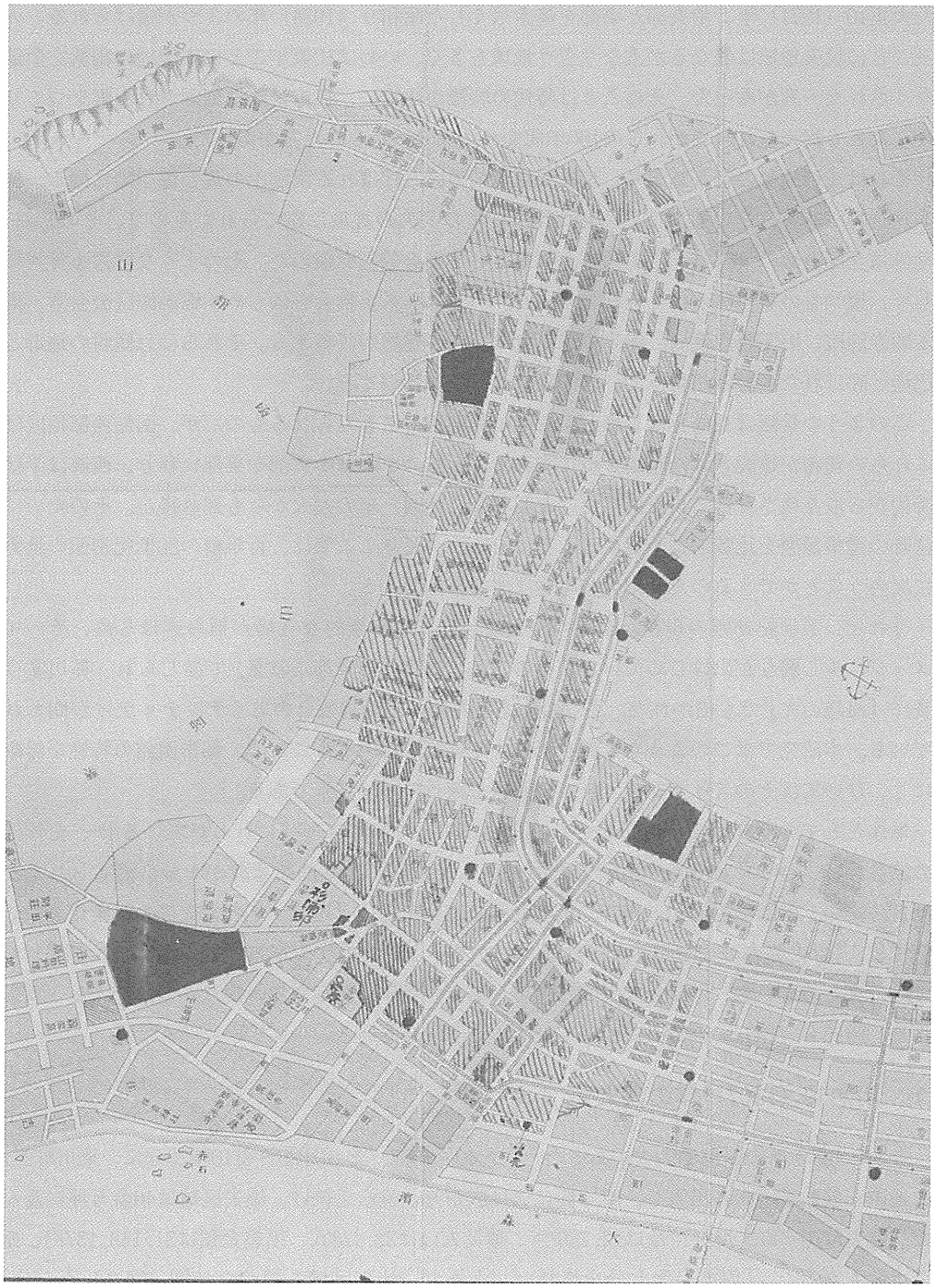

図２　▨（斜線）部分が明治40年大火の焼失部分

「午後10時20分頃、東川町217番地石鹸製造所より出火（洋燈転落の説あり）、非常に強い東風と飛火により各所に延焼したため、消防活動が思うようにならず、火勢は拡大」

「翌26日午前９時25分ようやく鎮火した。被害は、罹災面積400,000坪、焼失戸数12,390戸、死者８名、負傷者1,000名に達した」

焼けた町を次に示す。

「会所町、寿町、恵比寿町、大町、大黒町、鱸潤町、鍛治町、富岡町、旅籠町、天神町、駒止町、末広町、東浜町、船場町の14町全部を焼失、元町、曙町、汐見町、青柳町、春日町、蓬莱町、相生町、弁天町、船見町、台町、山背泊町、小舟町、豊川町、汐止町、地蔵町、西川町、宝町、東川町、仲浜町、仲町の20町の一部を焼失」

焼失建築の主だったものを次にあげる。

「類焼した主たる建物には、函館庁舎、英国領事館、露国領事館、連隊区司令部、海事局、函館郵便局、函館電話局、商船学校、商業学校、高等女学校、函館病院その他私立病院８、区立小学校５、私立小学校６、会社38、銀行８、神社３、寺院６、教会５、新聞社５、劇場４等でその他商店、旅館、倉庫等主なる建築物が罹災」

函館とは津軽海峡に突出した函館山に続く砂州上につくられたロケーションゆえに、絶えず風が吹く町であり、火災は始終付きまとった。1000戸以上焼失した火災だけで、明治以降に明治40年までに明治４年、明治６年、明治12年、明治29年、明治32年と、計６回も起きていた。そのために「火災保険会社は函館の方角を鬼門と呼ぶ、明治元年より昨年（大正４年）までの焼失戸数は三万二百六戸、四十年八月の大火には一火災の損害三千五百万円」[12]という様態を示した。

明治40（1907）の大火の様子は焼け跡を撮影した絵葉書（写真１～４）に見ることができる。煉瓦塀と蔵だけが所々に焼け残る他は何もない光景に変わり果てていた。

火災が生じた時期に函館にいた歌人、石川啄木のリアルタイムの記録にはその様子が自虐的な筆裁きで記される。啄木はその年の５月に故郷渋民を離れ、函館の彌生小学校の代用教員を勤めつつも、一週間前に函館日日新聞の遊軍記者になったばかりで、この大火と遭遇して勤め先を失う。彌生小学校校舎も新聞社社屋も焼失した。啄木は火災の四日後の８月29日に大島経男[13]に出した手紙のなかで、大火の様子を次のように記した。

「同夜十時二十分東川町より出火、折柄の猛烈なる山背に煽られて天下無類の壮観を極め六時間にして、函館五分の四、戸数一万五千戸を焼き尽し候、ナント／＼、小生生れてよりアレ位ハンドルングの雄大にして、悲壮を極め、且つ意味深甚なる芝居を見た事無之候、光景は何人も形容すること能はじ、火なる哉、火なる哉、函館の根本的革命は真赤な火によつて成し遂げられ侯、残れるは多く云ふに足らぬ貧乏町に候へば、先づ以て過去の函館其物が世界より焼き飛ばされたりと思召被下度候、一夜一億円の仕事とは一寸人間共に出来ぬ事に

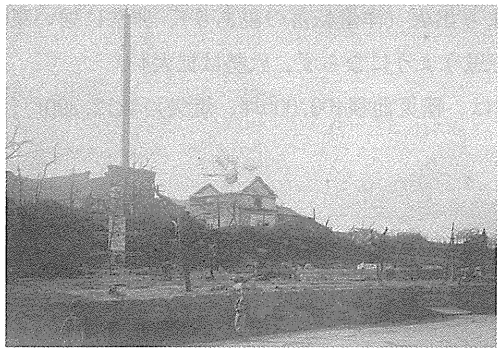

写真１　焼け跡・弁天町方向を見る

写真２　英国領事館の焼け跡

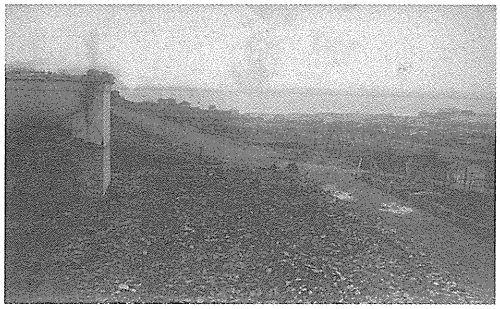

写真３　町会所の焼け跡

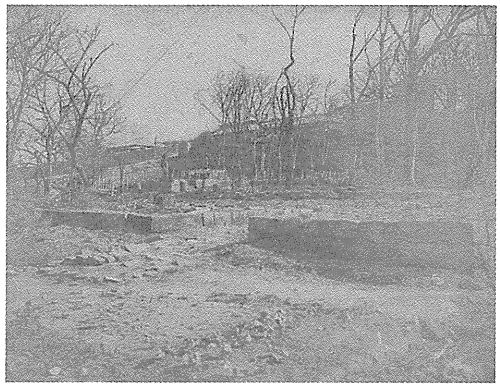

写真４　ハリストス教会焼け跡

候、刻一刻に自然に背ける函館が、一本のマツチによつてペロリと消えて了つたなど、惘れて物がいへず、自然が當む深刻なる滑稽は之也、混雑といへば混雑、惨状といへば惨状、実は人間の語でアノ夜の光最は云ひ表されぬに候、狂へる雲、狂へる風、狂へる火、狂へる人、狂へる巡査、狂へる犬、イヤハヤ、アノ狂へる雲の上には狂へる神が狂へる下界の物音に浮気を起して舞踏でもやつて居た事に候ふべし、（中略）学校で残つたのは住吉東川若松高砂の四校、アトは皆焼けたり、女学校など両遊廓と共に一つも残らず、役所で残つたのは区役所税務署裁判所測候所税関米国領事館の六、アトは支庁も黒犬の警察も郵便局も英露領事館も何もかも灰、新聞は北海一つ残り候、銀行も皆やけ郵船会社など倉庫諸共昇天、家を失へるもの六万余、大抵は学校とか寺院とかへ入り込みたり、区役所で黒い握り飯を喰はせ居候（中略）

昨日一日の雨にて全市の焼跡劫初の寂寞にかへり申候、出でて望めば宛然死の都也、戦後の光景とはこんなものにや、実に名状しがたき淋しさに候、蓋し函館は死したる也、死んだ都を御覧になりたくば、否々、世界一の名優のやつた大芝居を見なかりしのが残念に候はゞ、この焼跡見にお出なされ度候、魚油肥料の倉庫今日にいたるも猶煙を絶たず候、草々頓首

四十年八月二十九日夜　　啄木拝」

東京以北最大の規模を誇った都市を一晩で消滅させた突然の大災害を、啄木は「芝居」と見立て、焼け跡の函館を「死の都」と喩えた。文中での「名状しがたき淋しさ」とは歌人の感性だろう。啄木は青柳町に居を構えていたことで、類焼を逃れえた。大火より２日後の８月27日の日記には焼け跡の町の様子を次のように記した。

「京中は惨状を極めたり、町々に猶所々火の残れるを見、黄煙全市の天を掩ふて天日を仰ぐ能はず。人の死骸あり、犬の死骸あり、猫の死骸あり、皆黒くして南瓜の焼けたると相伍せり、焼失戸数一万五千に上る、（中略）火は大洪水の如く街々を流れ、火の子は夕立の雨の如く、幾億万の赤き糸を束ねたるが如く降れりき、（中略）函館は千百の過去の罪業と共に焼尽して今や新らしき建設を要する新時代となりぬ、予は寧ろこれを以て函館のために祝盃をあげむとす」

啄木らしくこれからの函館の「新時代」と称した。実際に一世紀後の我々が向き合うのはこの時に復興した建築であり、ここに函館の新しいアイデンティティの一端をみることができる。

一方で冷静な眼差しで、函館大火の事由を分析した官僚がいた。北海道庁参事官として北海道に５年間居住した文部省普通學務局長．白仁武（しらにたけし）[14]である。白仁は次のように記した。

「函館の大火は同地の繁栄上非常の打撃にて甚だ痛心に堪へざる所なるが　北海道に於ける都市の大火は珍しき事にあらず　函館の如きも二十四五年頃大火あり　札幌小樽等の如きも千戸以上の大火は既に数回の苦き経験を嘗めたる所なり　元來北海道に於ける現住民の大多数は永久移住の観念なくして　何れも儲けたる暁には内地の故郷に帰らんとのみ思ひ居る者にて　従て其住家の如きも石造煉瓦々葺等の永久的施設を為さずして　唯一時の間に合わせに廉価の木材を以て建設し　屋根は何れも柿葺なり　然るに同道一般冬季は霜雪に閉ぢ込めらるゞも　春夏の候に至れば晴天打続きて　霜雪の全く融解消滅する頃には常に西比利亞地方より乾燥せる風吹き來り　屋根も壁も照り返りて煙草の殻　若くは燐寸一本にてもパッと燃え付く様なる工合なるが故に　一朝発火せんか降り來る火の粉は吹雪の如く四方に飛火して　一時に火の手を数箇所に揚ぐる次第なれば如何に巧妙なる消防の手段を盡すも　千戸内外の大火は瞬く内なり　殊に同地は空気を凌ぐ爲に一家の裏必ず一畳敷及至一坪位の炉一二箇所宛を設けて暖を取るが故に　活火の絶ゆることなく火を粗末にする風あれば自然火事を起し易きの感あり」[15]。

明治後期の北海道の都市の建築的位置付けならびに居住者の気質をよく示している。開拓が始まって40年ほどしか経過しておらず、当然「永久移住」の観念はなく、そのために家屋の多くがこの時点では本建築ではない、なかば仮設建築の様態にあったことがうかがえる。とりわけ住宅については板張りの簡易なものが多かった。この建築材についての詳細な情報は「北海道観」というシリーズの一環として、『時事新報』に掲載された。次に示す。

「然も一般の家屋が火災に弱き共通の欠点は壁を用いずして板張りなる所にあり、三代将軍家光公の昔松平伊豆守が当区に物見櫓を設けんとするや烈風幾度も壁を落して櫓遂に成らず　茲に板の裏に紙を張りて漸く成就せし歴史は伝わりて　今日の函館区を板と板とにて包むに至り烈風と共に函館火災の一因とはなりしなり」[16]

この火災を契機にして、公共建築を中心に本格的な建築に変わっていく。そのことは後で見る。と同時にこの時期以降に、函館生まれの世代が誕生し、徐々に永住の考えが芽生えていったものと捉えられる。当然のことだが、代を重ねるごとに最初の移住者の故郷からは遠くなっていき、新しい土地への愛着が芽生える。

2　大火直前の函館

2-1　民間主導の町

「函館区は本道第一の都会として帝国五港の一として、諸般の整備甚だ完からさるもの多きは、吾人の常に遺憾とする所なり、水道既に給せられ、築港亦た成る、鉄道通し、船渠成れりと称す、而して吾人は徒らに其形影の美に随喜する者にあらす」

明治36（1903）年１月17日付の「函館公論」の論評である。古今東西を問わず、港町のほとんどが「民間主導」の町であるように、函館は開拓使本庁が置かれた明治初期の数年間を除けば、一貫して「民」の町として存在した。そのことに関連し北海道最初の建築史家の遠藤明久は、建築洋風化過程の観点で「函館のそれは商館を主体とする民間主導型とすれば、札幌は開拓使関係施設に限定された官庁主導型である」[17]と評した。

そのことをよく示すものとして、函館区の重要な公共施設が函館の富豪たちの寄付金によって建設されていたことが揚げられる。明治前期までは函館の実業界で函館四天王[18]といわれた今井市右衛門、平田文右衛門、渡辺熊四郎、平塚時蔵の４人がおり、函館公園や第一公立病院、彌生小学校、貧窮者のための鶴岡学校といった公共施設をつくりあげ、一方で造船所、器機製作所、新聞社などを設立し、函館繁栄の礎を築いた。本来は自治体がおこなうことを民間人が主体となって、成し遂げた点に特徴があって、何もなかった新開地の函館を「都市」として整備していった。そのような手法は明治後期の時代へも受け継がれることになる。

明治後期では函館四天王のひとり、渡辺熊四郎と函館屈指の豪商で北海道最初の貴族院議院をつとめた相馬哲平[19]が競い合って寄附をおこない、函館の主要な公共建築が建設されていく。すなわち大火前には函館区役所と函館病院、大火以降では函館区公会堂、図書館書庫などがある。函館病院は明治33（1900）年に焼失し、その後財政的な問題で再建できなかったが、明治35（1902）年10月に渡辺熊四郎が建設費10万円を寄附し、明治38（1905）年に再建された。一方明治40（1907）年の大火で焼失から逃れた函館区役所は明治35（1902）年に竣工していたが、この建物は建設にあたって相馬哲平により、豊川町に敷地404坪と3000円の建築費の寄附があり移転建設されることになった。相馬哲平は「郷土報恩」の精神で公共事業に献身し、大火後に焼失した町会所を復興させるために建設費５万円を寄附した。現在の函館区公会堂である。

また旧函館市立図書館の鉄筋コンクリート造書庫も相馬哲平の寄附によるものだった。

このように函館は富豪間の競争原理による寄附合戦があって、そのことで函館の町の公共建築が建設されていったという実情があった。ここからはいかに「民間」が主導した町だったかが伝わってくる。

2-2　建築諸相

大火までの函館にはいったいどのような建物があって、どのような景観を形成していたのだろうか。表１に示した明治40（1907）年の大火時の主要焼失建物についてみると、その多くは明治20年代・30年代に建設されたものからなることがわかる。筆者は可能な限り、ここで載せた68件の建物の外観写真を確認した。その結果、公共建築をはじめ、学校、キリスト教会、社寺、領事館、民間事務所、芝居小屋、料理屋など建築類型別にみると、教会や領事館などについては当初より洋風であり、公共建築や学校、一部の民間事務所などは多分に擬洋風簡素な装いを残した簡素な建物であり、社寺は伝統的な和風を示す、という図式が浮上する。ただ外壁の仕上げや材料という点では下見板貼りが圧倒的に多い。

函館の人口[20]は明治35（1902）年に91,456人に達し、全国で第８位になる。明治19（1886）年では45,477人あり、全国で第13位だった。すなわち明治20年代に加速度的に移住者が増加し、人口が急増した。そのために市街地が拡大し、家屋の建設ブームが生まれていた。大火時の主要焼失建物は明治20年代という時期を境に二分される。

明治20（1887）年までに撮影された古写真[21]を分類すると、和風・洋風・擬洋風の３つに分けることができる。和風は開拓使本庁（明治２年）や税関（明治５年・写真５）をはじめ圧倒的に多くの一般住宅に用いられた。洋風は各国の領事館など外国人関連の施設と、天主公教会堂（明治10年）や遺愛女学校（明治15年）などキリスト教関連施設について採用された。擬洋風は函館区役所（明治13年）や博物館（明治12年・明治17年）、学校など公共建築のほかに、銀

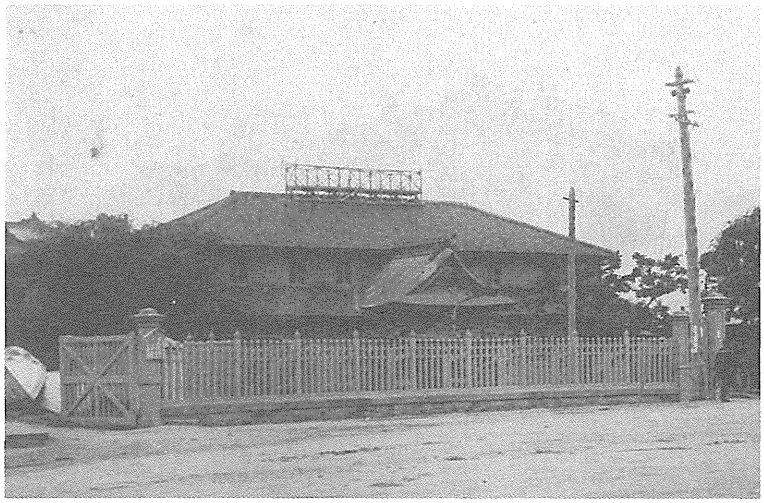

写真５　大火前の税関

行や商店などに幅広く普及する。

函館での擬洋風建築の特徴は２つあり、ひとつは外壁材の点で、もうひとつは建築スタイルの点にある。前者からみると、函館での擬洋風建築は「内地」に多かった土蔵造のように塗り込められたものは少なく、下見板貼りによる外壁を示すものが多かった。後者は東北などの「内地」の擬洋風とは異なって[22]、より本格的な洋風に近い段階の擬洋風が多かった。その大規模に展開された事例としては函館商船学校[23]（明治16年・写真６）や日本郵船函館支店（明治18年）があり、函館商船学校では時計の付いた塔屋を中央に設け、下見板貼りながらも左右に翼部が張り出す。また窓上がペディメントで装飾されるなどの意匠を見せ、アメリカで流行していた木造ステックスタイルによる影響が強い。

明治20（1887）年以降の家屋の建設ブームは「木造和洋折衷風家屋」[24]を生み出すことになる。それは現在も西部地区に幾棟も現存するが、１階が店となり和風スタイル、２階が住宅で洋風スタイルを示す木造２階建の小店舗である。その特徴は上下階で外観が異なる点にあり、一見何とも奇妙なスタイルともいえるが、おそらくは外観的に目立つ２階を洋風にすることで、全体を洋風のイメージにすることが目論まれたものと考えられる。１階を和風としたのは使い勝手の点であろう。なお「和洋折衷風」とは洋風要素をみようみ真似で取り入れた擬洋風とは基本的に異なるものと、筆者は考えている。

この「和洋折衷風」とは『函館新聞』（明治24年７月12日）の次の記事からも窺うことができる。

「東浜町十九番地物産商金沢祐助氏住宅間口五間半奥行三間半惣二階付にて屋根は瓦木造の和洋折衷風其立派なること区内有数の家屋なり棟梁池田登良二[25]工事費千五百円」

写真６　商船学校

明治40（1907）年の火災直前まで、このような「和洋折衷風」で住宅が建てられていたことは次の一文からも伺える。

「火災毎に家屋の構造法は改良されて旧式の家屋は年毎に新規となり、既に道庁令を以て屋上制限令を設けられたる等全然奮態を脱して完美を盡に至れりされば大厦高楼和洋折衷の家屋少なからざるも就中近來評判の高きものは有江金太郎（東川町）明石正三郎（汐見町氏の家屋にて明石氏の家屋は和洋折衷の模範的に構造したるものとも云ふべきか何程の建築費を要せしや外面より見れば餘り鄙しからず）」[26]

明治32（1899）年に刊行された『函館実地明細絵図』[27]には「木造和洋折衷風家屋」の店舗併用住宅が数多く描かれており、当時の様子が読み取れる。多くの建物は伝統的な和風の2階建てからなることがわかるが、中には渡辺熊四郎の洋物本店や今井市右衛の洋物本店のように、窓の形などでは擬洋風建築特有の意匠を有した建物があったことが確認され、また役所や学校ではベランダが付いて、全体が下見板貼りの擬洋風になっていたことが読み取れる。ここに描かれた建物は明治11（1878）年・12（1879）年の火災の後に建設されたもので、その多くは明治40（1907）年の大火までは存在し続けた。

ここからは大火までの函館は洋風要素（和洋折衷風・擬洋風）も見られる建物も出現していたが、全体としては和風色の濃い町並みであったことが読み取れる。

そのことを含めて明治期の函館の建築について、前述の遠藤明久は次のように記した。

「函館の作品スタイルは和洋折衷を基調とし、他地域の擬洋風建築と共通感覚のものが多い。これに対して札幌のそれは、米国木造建築様式を祖型とするものにほぼ統一され、同時期の道外他都市に例を見ない高い純度をもつ。また函館では防火建築への強い志向が見られ、レンガ造り、石造り、土蔵造りで、カワラ葺きの建物が相当数出現する」[28]

明治30年代に入ると、これら「和洋折衷風」の家屋からなる町並みのなかに少しずつ、より本格的な洋風建築が建てられるようになる。そのことと関連して、明治34（1901）年の『英国領事報告』[29]には次のように記された。

「函館の町は重要さを増し、外観も大きく変わっている。毎年拡張されており、格好のよい家々が古くさいものと取換っている。北東方向にむかって拡張される予定になっている港の南部に、立派な海岸通りが作られている。現在、四軒のヨーロッパ風ホテル、イギリス人、フランス人、およびロシア人のホテルがある。また、毎月汽船の連絡が実施されており、中国および南の日本の港から訪問者を誘引している」

史料的な制約があって、これらのホテルの特定はできていないが、上記の文面を言葉通りに受け取るならば、随分と国際色豊かな景観が展開されていたことが想像できる。

2-3　函館区庁と函館病院

次に大火前の函館を代表する２つの建物をみる。

１つは明治35（1902）年に竣工する函館区庁舎（写真７）で、中央にマンサード屋根、左右にドーム屋根を抱いた木造下見板貼りの建築であり、大火の焼失を逃れ得た数少ない建築だった。幾分擬洋風的な装いの残った理由はおそらくは設計者の資質によるものと考えられる。この建物の設計は九萬勇六[30]であり、大工上がりの建築技術者だった。北海道鉄道会社の技術部門の責任者を任じつつも、函館区の建築主任を嘱託として勤め、庁舎の新築を担い、みずから設計図を作成した。九萬勇六は他に、拓殖銀行社宅、日進学校、大谷女学校の設計をおこなっていた。

もう１つは明治38（1905）年に建設された函館病院で、完成後２年も経たずに大火で焼失する。外観の写真は未見であるが、池田直二[31]という大工上がりの建築技術者によって設計がなされていた。池田直二は初代渡辺熊四郎の率いた金森商船の支配人を勤め、渡辺関係の建物の設計を担っていた。池田直二の弟に函館公認大工組合初代総組長の池田登良二がいて、英国領事館をはじめ、函館毎日新聞社、函館連隊司令部などを手掛けた。池田登良二は前節の「木造和洋折衷風家屋」の設計施工者でもあった。

函館区庁舎や函館病院の設計体制からは、函館の建物の設計が在野建築家によって担われていたことがわかる。なお明治前期の函館には開拓使函館支庁に建築の設計を担う営繕組織[32]があったが、函館の建築界に大きな影響を及ぼすまでには至らかなかった。

３　大火後の建設ラッシュ

3-1　復興の状況

大火後の復興計画とはいかなるものであったのだろうか。区による復興事業としては、被災した小学校校舎など公共建築の再建築と道路の改正の２点があった。そのことは函館区の区費の数値に表れでてくる。年度別の財政[33]を見ると、明治41（1908）年には災害事業費、明治42

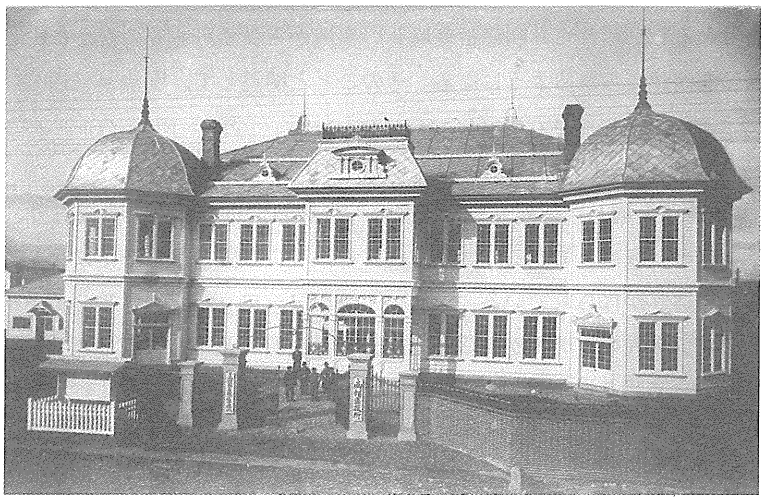

写真７　函館区庁舎

(1909) 年には学校や病院の建設などの臨時事業費が盛り込まれていた。臨時費として明治41 (1908) 年が426,577円、明治42 (1909) 年が231,580円、明治43 (1910) 年が706,049円と計上され、それ以前の明治40 (1907) 年の109,728円、それ以降の明治44 (1911) 年の110,473円と比較すれば、この3年間だけは大きく突出した金額を示した。それらは区債によってまかなわれる。

そこから捻出された建設費以外に、得られた火災保険金によって再建されたケースも確認される。その事例のひとつ、函館病院では明治38 (1905) 年に予算10万円を以て新築されたが、わずか2年後には大火により焼失するが、火災保険金9万円が得られ、その費用でもって直ちに再築 (写真8)[34]がはかられた。

一方で目立った市街地の改良は実施されず、その内容は小規模な道路改修に留まった。

だが、民間レベルでは翌明治41 (1908) 年には建設ラッシュが興っていた。その様子は「この年、市街のいたるところで家屋の建築が盛んに行われ、多数の諸工が入り込み、各商店は明治40年の大火の復興景気で潤う」[35]というものであった。いつまで復興景気が続いたのかの線引きは困難であるが、「約一年を費やし市街は稍々旧態に復す」[36]という状況だったようだ。復興事業については前述のように臨時費の計上金額からは明治43 (1910) 年頃まで続いたものと判断できる。その結果、函館の市街は次のような様相を呈すことになる。

「火災は本願寺をしてコンクリートと煉瓦とによりて固めして又函館の全市に年々新装を呈せしむ富に不自由なき函館は焼けても焼けても新築を厭わず斯くて市街は年々文明的建築を増加し対岸の青森より来るものをして殆ど別天地の感あらしむ上野以北に於ける第一の市街は函館なり、上野以北に於て市街電車の敷かれたるもの亦函館を以て随一となす」[37]

そのことに関連して、函館が生んだ郷土史家の神山茂[38]は今からちょうど半世紀前の昭和36 (1961) 年1月1日に次のように記した。

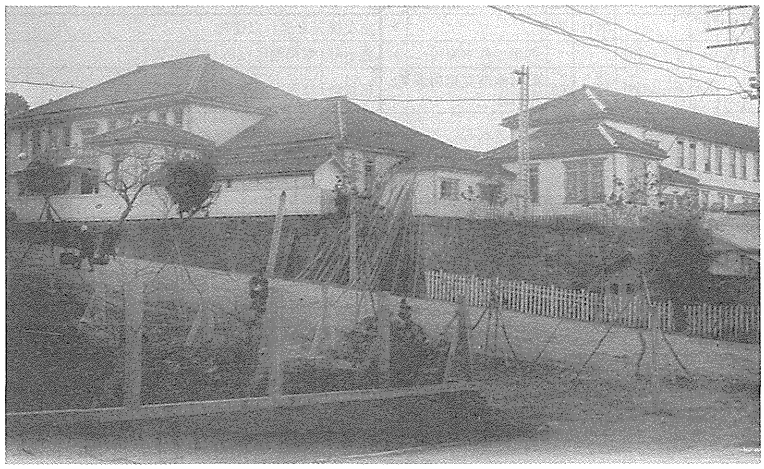

写真8　大火後の函館病院

【表１】明治40年大火時の主要焼失建物と再建の一覧

	焼失建物					再建建物			
町名	建物名	竣工年	構造	外観	備考	竣工年	構造	備考	現存
元町	函館支庁	M26	W	○		M42	W	元町観光案内所・写真歴史館	○
〃	函館高等女学校	M39	W	○	庁立	M41	W	現在の函館西高等学校	×
〃	函館商業学校	M28	W	○	庁立	M41	W	T10大火で焼失し、五稜郭に移転	×
〃	聖保緑女学校	M19	W	○	聖パウロ会	M41	W	白百合学園女子高校の前身	×
〃	大谷派本願寺別院	M14	W	○		T4	RC	重要文化財	○
〃	中華会館	M39	W	—	洋館風	M43	煉瓦	関帝廟の型式	○
〃	遣愛女学校	M15	W	○		M41	W	湯ノ川通りに移転、重要文化財	○
〃	元町天主堂	M10	W	○	カトリック	M43	煉瓦	T10大火で焼失し、煉瓦壁を利用し再建	△
〃	清和女学校	M22	W	—	日本聖公會			廃校	
〃	ハリストス教会	1860	W	○		T6	煉瓦	そのまま	○
〃	遣愛幼稚園	M28	W	○		T2	W	遣愛学院発祥の地	○
會所町	英國領事館	M18	W	○		T2	煉瓦	現．開港記念館	○
〃	メソジスト教會	M19		—		M42	不明	T10大火で焼失	×
〃	函館女子小学校	M22	W	—		M43	W	汐見町に移転、跡地は函館区公会堂	×
〃	電話交換局	—	—	—		—	—		—
〃	北海道庁官舎	—	—	—		—	—		—
〃	渡辺病院	M24	W	—		M41	W		×
〃	北辰館	—	—	—		—	—		—
〃	函館裁縫女學校	M33	W	○		M41	W		—
相生町	堀川小學校	M19	W	○	私立小学校			再建されず廃校	×
〃	黒住教會	M18	W	—		—		現在は松陰町	×
〃	日本基督一致教會	M25	W	—		M41	W	同一の場所で再建	×
曙町	函館大谷女学校	M21	W	○	元．六和女学校	M43	W	現在の函館大谷高等学校	×
〃	日本聖公會堂	M28	W	○		—	W	蓬莱町に移りT10大火で焼失、現在は元町で聖ヨハネ教会	×
天神町	函館病院	M38	W	○	10万円の建設費	M42	W	保険金で直ちに再建	×
〃	彌生小學校	M40	W	○		M42	W		×
〃	寶小学校	M20	W	○		M41	W		×
〃	若山小學校	M14	W	—	私立小学校			再建されず廃校	×
船見町	露西亜領事館	M39	—	○	ゼール設計	M41	煉瓦	旧函館市立道南青年の家	○
〃	函館連隊区司令部	M32	W	—		—	W	再建される	—
鍛冶町	幸小學校	M30	W	○		M41	W		×
〃	商船學校	M24	W	○		M43	W	船見町天神町に移転	×
〃	海事局	M24	W	—		M43	W		×
〃	芸妓待合所	—	—	—				遊廓はこの場所では廃止	—
富岡町	警察署	M14	W	○		M40	W		×
〃	函館毎日新聞社	M11	W	○		—	—		—
〃	巡査教習所	—	—	—		—	—		—
〃	町會所	M19	W	○		M43	W−	函館区公会堂に繋がる	○
〃	函館女子裁縫館	M24	W	○		M41	W		—

	焼失建物					再建建物			
町名	建物名	竣工年	構造	外観	備考	竣工年	構造	備考	現存
鹽潤町	函館座	—	—	—		—	—	再建	—
大黒町	改進亭	—	—	—		—	—		—
弁天町	弁天社	M35	W	—	材木甚三郎．作	—	—		—
大町	内国通信會社	—	—	—		—	—		—
末廣町	日本銀行出張所	M26	W	○		M44	W	豊川町に移転	×
〃	北海道拓殖銀行支店	M26	W	○	元三井銀行支店の建物	M42	W		—
〃	第三銀行支店	M20	W	○		—	—	富士銀行	—
〃	函館銀行	M29	W	○		—	—	同じ末廣町で移動	—
〃	郵便電信局	M18	W	—		M44	煉瓦	はこだて明治館	○
〃	北海道貯蓄銀行	—	—	○	前．江差銀行出張所	—	—		—
〃	日本生命保険會社	—	—	—		—	—		—
東濱町	二十銀行支店	M18		○	東京に本店			大正元年に第一銀行に吸収	—
〃	函館日々新聞社	—	W	—	石川啄木が勤務	—	—		—
寮町	池田座	M30	W	—		—	—	再建	×
〃	大和座	—	—	—		—	—	再建	×
豊川町	豊川稲荷	—	—	—		—	—		—
地蔵町	北海新聞社	—	—	—		—	—		—
〃	吉祥女學院	M22	W	—	高龍寺内曹洞宗	—	—	西川町に移転	—
船場町	日本郵船會社	M18	W	○	現．BAYはこだての赤煉瓦倉庫ではない	—	—		×
〃	函館汽船會社	M22	W	—		—	—		—
〃	金森倉庫廻漕店	M20	煉瓦	○	日本郵船の倉庫を一部転用	M42	煉瓦	現.BAYはこだての赤煉瓦倉庫	○
東川町	巴座	—	—	—		—	—	再建	×
〃	本派本願寺別院	M12	W	○		M43	煉瓦	欧風	×
〃	函館実践女学校	M39	W	—		M40	W	仮校舎、昭和4年のRC校舎が現函館龍谷幼稚園に使用	×
恵比寿町	竹内亭	—	—	—		—	—	再建	×
〃	北海亭	—	—	—		—	—	再建	×
主な焼失を逃れた建物									
豊川町	※函館区役所	M35	W	○				焼失を逃れた	×
船見町	※米国領事館		W	○				焼失を逃れた	×
東浜町	※函館税関	M7	W	○	和風	M44	W	焼失を逃れ、その後に新築	×
汐見町	※税務署	M40	W	—		—	—	招魂社下に新築移転しており、焼失していない	×
〃	※控訴院	M31	W	○	近代和風			焼失を逃れた	×
〃	※裁判所	−	−	−				焼失を逃れた	×
元町	※函館水道事務所	M22	煉瓦	○				復旧し現水道局元町配水場管理事務所	○
高砂町	※函館測候所	M12	W	○				焼失を逃れた	×

出典：『富の函館』、神山茂『函館教育年表』、『函館市史通説編第二巻』、『函館市史通説編第三巻』、『函館市史年表編』、『目で見る函館のうつりかわり』、『函館市史誌』、新聞記事などを参考に作成する。
凡例：建物名称前の※は焼失しなかった建物を示す。外観の○は写真等で確認、−は未確認、構造のWは木造、−は不明、竣工年の−は不明、現存の○は現存、×は消滅、△は一部残る。備考：町名は明治40年８月25日の当時のもの

「こうして函館は北海道の開拓が進展するとともに明治時代の最盛期にはいっていった。明治時代も末期に近づき四十年になったが、この間に大きな火災は度々あった。併し四十年の八月、東川町の一角から出火した業火は一夜にして函館の大半を焼土と化してしまった。そして台町と蓬莱町とにあった遊廓が大森町に移り、若松町の海岸に鉄道の青函連絡船桟橋が出来、所謂大門通りが賑うと函館の町は更に東へと伸びていった」[39]

3-2　復興建築の構造と手法

表１に記した復興建築の様態をみると、焼失した64の建物の内、34で再建が確認される。私立小学校のほとんどが廃校となる。再建は明治41（1908）年から43（1910）年にかけての３年間に集中しており、26の建物が完成した。教会堂や寺院は復興に時間がかかっており、再建に最も遅れたハリストス正教会[40]は大火より10年目の大正６（1917）年に竣工していた。

建築構造の別にみれば、再見された34の建物の内、７の建物が煉瓦造を採用していたことが判明する。その内訳は教会堂や寺院[41]、領事館などであって、公共建築としては１つの郵便局（写真９）が確認されるだけだったが、その他に鉄筋コンクリート造が１建物（東本願寺函館別院[42]）あった。ともに耐火性が考えられてのことだった。

ところが、である。小学校や病院などの区の造営物、函館支庁や警察署、学校などの庁の造営物、税関のような国の造営物のほとんどが火災に弱い木造で再建された。しかも外壁は木を貼り付けただけの下見板張が用いられる。その事由は定かではないが、公共建築物では大規模な建坪・延坪を有するケースが多く、莫大にかかる建設費を考えれば、木造以外に選択肢はなかったのだろう。その実、火災保険にはいずれの公共建築も入っており、前述したように函館病院の場合の復興費用は保険金から充当されており、その他の小学校も同様なケースがあったようだ。

そのようななかで、明治44（1911）年に竣工した日本銀行函館支店[43]だけは木造ながらも、外壁は堅瓦張の上に漆喰塗となり、防火に対して考慮した仕上げとなっていた。このような防火の処置が施された事由は、国の機関のひとつであり、それだけ重要な施設という位置付けが

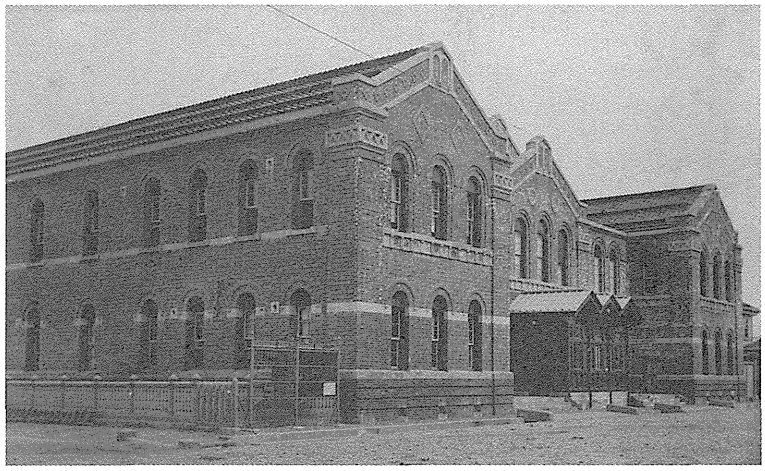

写真９　郵便局（現存）

あったからだと思われる。この建物は皮肉にも大正13（1924）年の火災で焼失した。その設計は日本の建築界の指導者だった辰野金吾と長野宇平治が担った。

このような塗壁の仕上げは大火以降に、函館でひとつの流行をみせていた。その嚆矢は明治41（1908）年11月に落成した帝国博品館（写真10～11）[44]であり、東京以北第一の規模を誇る勧工場だった。木骨4階建で、外壁は漆喰塗り仕上げとなっていた。続くものに大正6（1917）年に宝町に移転して竣工する函館警察署（写真12）があり、木骨の塗壁仕上げだった。

このような「木骨漆喰塗り」は外観上西洋の組積造による歴史様式を模していたために、「虚為の構造」[45]という見方をされる一面もあったが、明治後期から大正期にかけて全国的に普及する。防火という観点では木部が剥き出しの木造に較べて、木骨漆喰塗りは外壁面に木部が表出しないために有利と考えられていた。このような「木骨漆喰塗り」とは最初は博覧会の仮設建築物として現れたものであり、次に外観が重視される商業建築に採用され、その後は防火性

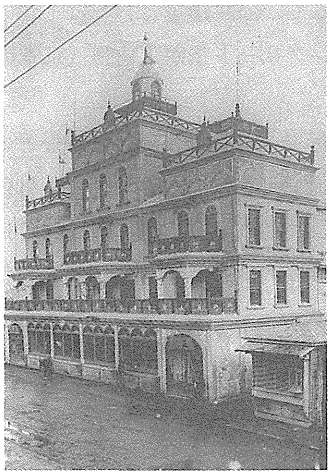

写真10　帝国博品館・正面

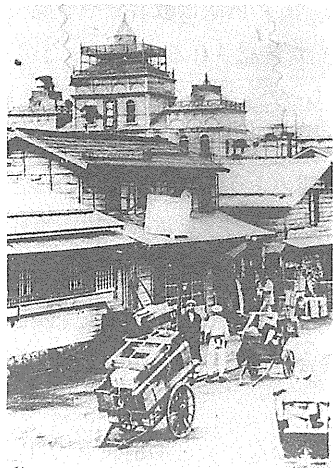

写真11　帝国博品館・背面

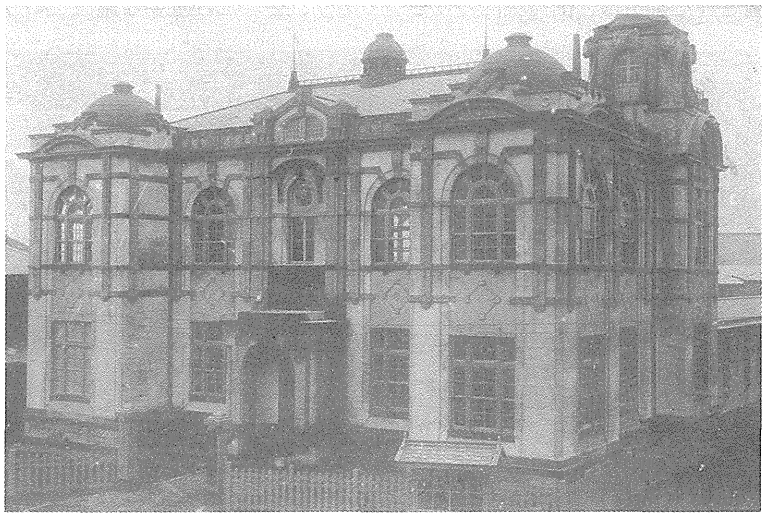

写真12　警察署（大正６年）

ゆえに一般的な建築にも用いられるようになった。このような手法は鉄網コンクリート[46]、すなわち現在のモルタル塗りへと繋がっていく。最新のモダンな外壁仕上げ方が大火後の函館の市街地建築にいち早く現れていたことは、函館が東京とダイレクトに繋がった都市であったことを示している。

3-3　区公会堂と帝国博品館

次に大火後の函館を代表する２つの建物をみる。

大火後の建築を代表するものが、明治43（1910）年に竣工した函館区公会堂（写真13）である。この建物は大火で焼失した町会所（写真14）等の復興建築として建設された。町会所の位置は大火前の明治32（1899）年に発行の『改正函館港全図』（図３）[47]に記載される。下見板貼り建築だが、左右に翼部を配し、中央部２階には列柱が建ち並ぶバルコニー、そして翼部も含めて３つのベランダが海にむかって張り出し、屋根にはドーマ窓が立ち上げられる。翼部の切妻破風の唐草文様をはじめ、軒下、窓廻り、ベランダの欄干、柱頭と、各部位には装飾が施され、いずれもが西洋歴史様式の影響を受けた本格的な建築になっている。このような贅が尽くされた事由のひとつに、皇太子（後の大正天皇）の予定された行幸の宿舎になることが決定していたことが関係する。

興味深いことに、この設計は東京や札幌の建築技術者ではなく、函館出身の区役所内の営繕技術者がおこなっていた。その設計者．小西朝太郎は明治12（1879）年に生まれ、第八師団経理部函館出張所で建築術を習得し、函樽鉄道の技術員を経て明治40（1907）年28歳の時に、函館区役所土木課営繕主任となり、公会堂の設計を担う。先輩である技手．渋谷源吉[48]（現場監理担当）や請負人で棟梁．村木甚三郎らの指導を受けながら、設計に当たったという。この建物に少し擬洋風的な意匠要素が伺えるのは、設計者が建築の高等教育を受けた技術者でなかったことによるものと思われる。小西朝太郎は函館区が大正11（1922）年に市制を敷くまでの15年間、函館区の建築部門の最高責任者を勤めた。大火復興にあたっては、彌生小学校や寳小学校、幸小学校などの区の造営物の設計を手掛けた。

もう１つは帝国博品館という勧工場で、前述したように「木骨漆喰塗り」という新しい手法を最初に、しかも大規模に展開したという点で取り上げる。驚くべきは木造４階建という、北

写真13　区公会堂・正面

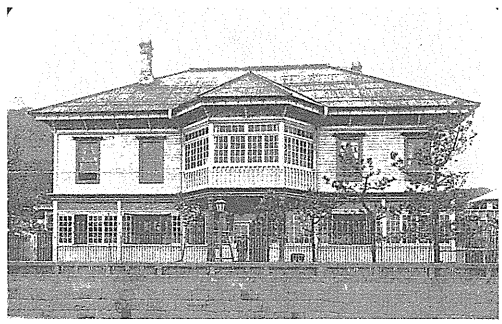

写真14　町会所

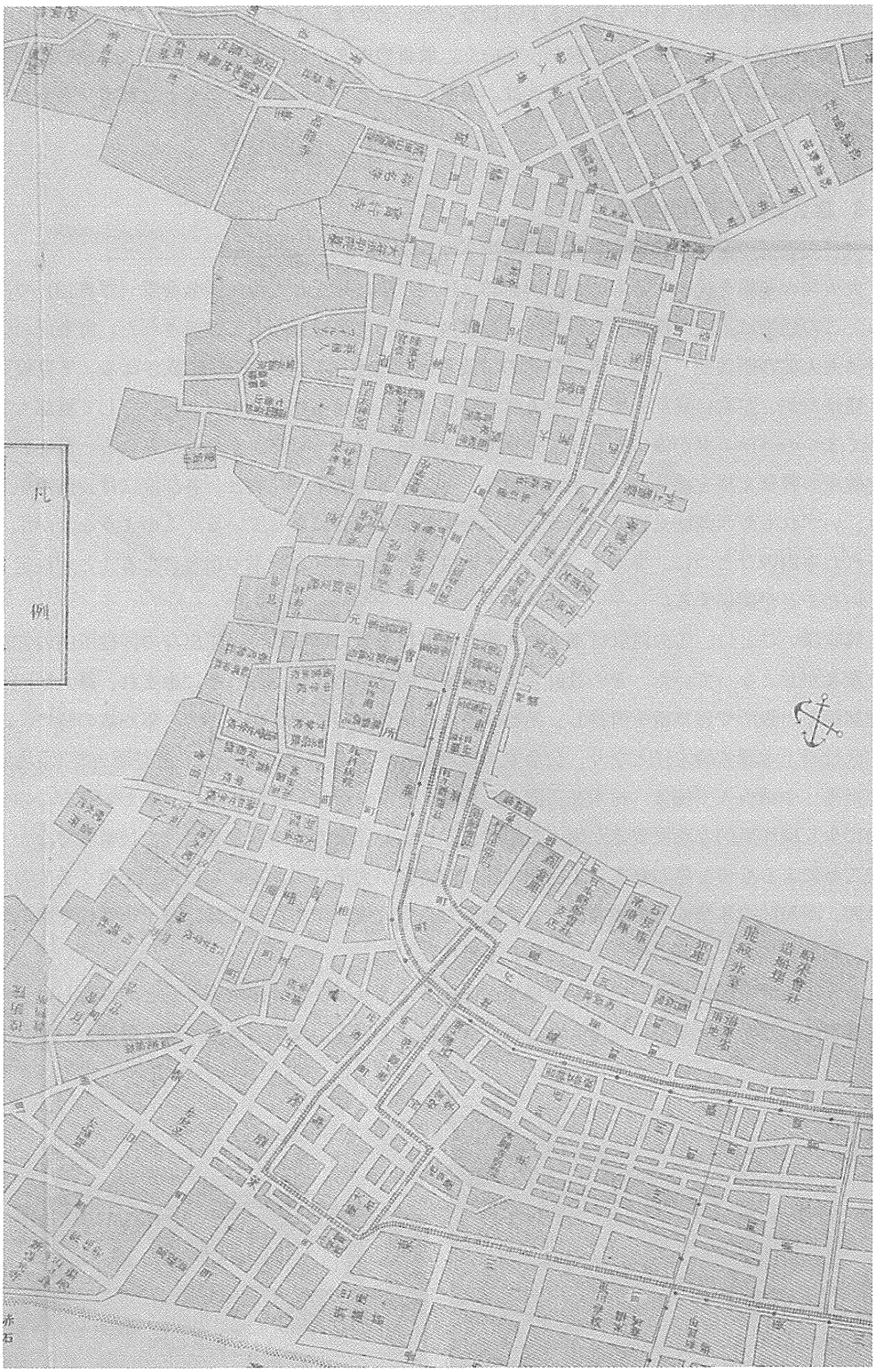

図３　『改正函館港全図』（明治32年）

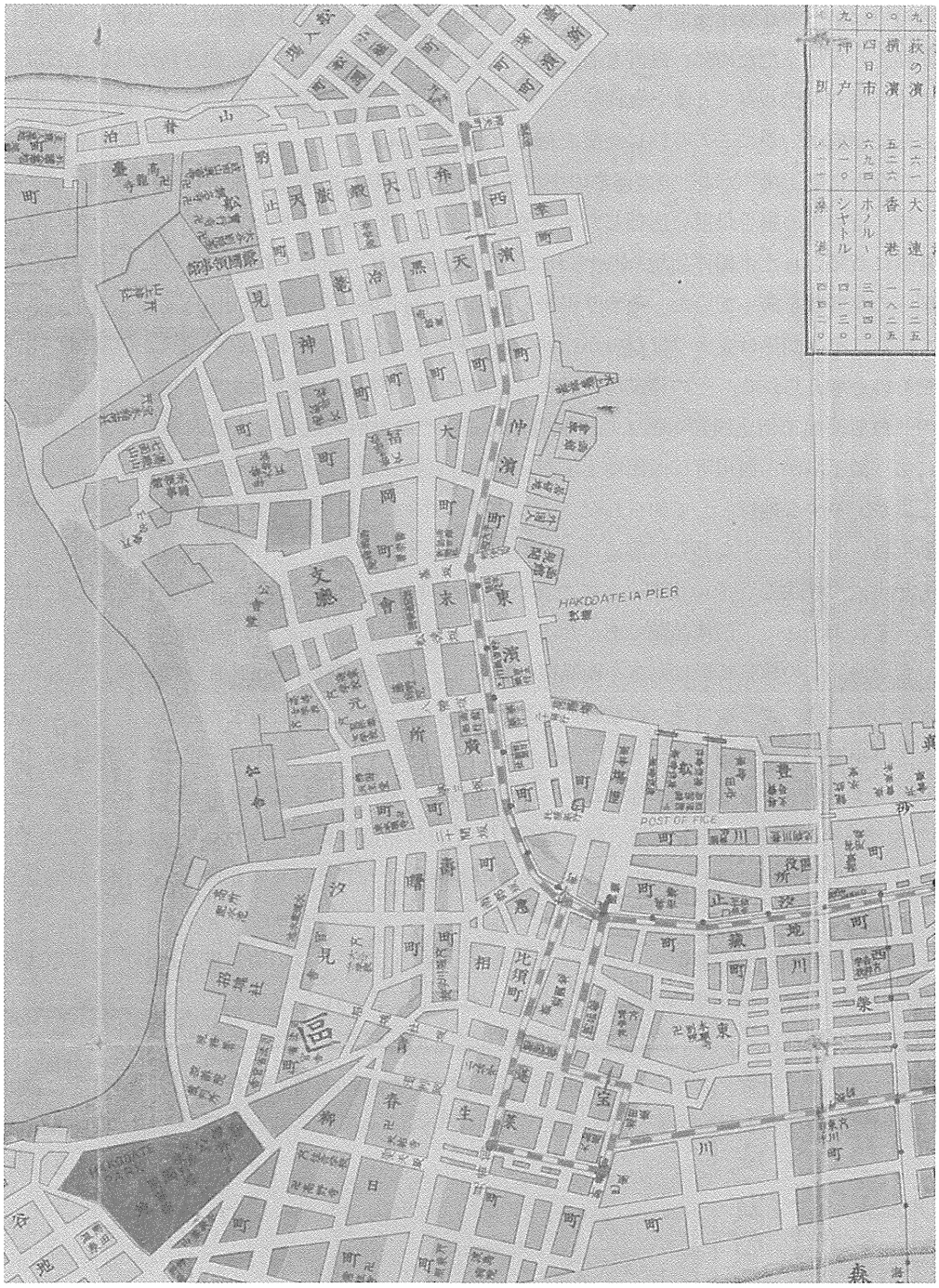

図４　『最新函館市街全図』（明治44年）

海道では第一の高層建築であったことだ。大正10（1921）年の大火で焼失し、わずか13年間しか存在しなかったために、設計者名も含めて多くは判明していないが、残された写真からはその威容振りが伝わってくる。と同時にこのような立派な建築を建設できたという意味で、都市として函館がいかにこの時期に隆盛を極めたかが伺える。

ちなみに勧工場[49]とは一つの建物の中に各種商店が連合して商品を陳列した一種のマーケットで、百貨店の誕生以前に流行した商業施設だった。勧工場としては明治32（1899）年に東京新橋に新築された帝国博品館[50]が知られており、ドーム状の屋根を掲げた特異な外観を表し全国一の集客数を誇っていた。その９年後の函館で、同じ名称である「帝国博品館」が建設されていた。その関係は定かではないが、同一の名称ということを考えれば、何らかの関係があったものと考えられる。その建設場所は宝町と恵比須町が接する場所であり、明治44（1911）年の『最新函館市街全図』[51]（図４）に記載がある。その場所に近接して大火前には、恵比須町に第一勧工場が、西川町に函館勧工場が、蓬莱町に蓬廓勧工場の計３つの勧工場があって、勧工場が密集する地域として知られた。その様子は図３に見ることができる。他に大黒町に大黒勧工場があった。すなわち函館にはこの時期計４つ[52]があって、これら４つの勧工場はいずれもが大火で焼失し、その復興としてたった１つだけ勧工場が建設されたと考えることもできる。それが、この帝国博品館であった。

帝国博品館の建築特徴は階下を商品陳列場とし、階上を活動写真常設館（映画館）としたことである。そのようなプランは建物の形を規定し、ホールを上階に載せた４層にもわたる構造を生み出す。外観をみると、街路に面してテラスが設けられ、建物は上階にいく程にセットバックする形態を取る。窓上部にはアーチが連続し、飾り付けの細部装飾が施される。幾つものベランダ、屋根にはドーマ窓、屋上展望台の上には塔屋が聳え、きわめて変化に富んだ賑やかなファサードが出現していた。このような装飾性に溢れるという点では区公会堂の細部意匠に通ずる点も見られる。

帝国博品館でいかに華麗なファサードが実現したかについては、明治17（1884）年に恵比須町に完成した第一勧工場（写真15）[53]と比較すれば、理解される。下見板貼りの２階建の第一勧工場は、角地にあって二面に切妻の破風を立ち上げ、その破風にアメリカで19世紀に流行ったカーペンターゴシック風の装飾が用いられるなど洋風意匠が用いられたものだったが、帝国博品館は漆喰塗りとはいえ本格的な西洋建築の装いであって、これと比較すればきわめて簡素

写真15　第一勧工場

なものと見るほかない。ここに大きな隔絶をみることができる。

すなわちこの時期函館は、木造建築という点では頂点に達していたものと考えられる。

3-4　基坂通の復興

現在、基坂の上には元町公園があって、その周囲には旧函館区公会堂や旧イギリス領事館、旧函館支庁などがあり、函館有数の観光名所となる。またこの一帯は平成元（1988）年に国によって、函館市元町末広町伝統的建造物群保存地区に選定されている。

復興された都市の様子を大火で一帯が全焼した基坂（もといざか）通の建物（写真16）からみる。明治44（1911）年の『最新函館市街全図』（図３）からは、海岸には税関が、山側のアイストップとしては北海道庁の出先機関としての官庁．函館支庁があり、その山側には華麗な公会堂が新設される。東側を山から海にむかってみれば、相馬哲平邸、英国領事館、日本銀行があり、西側をみれば、函館病院、警察署、函館毎日新聞社、相馬合名会社、と並ぶ。

大火直前の基坂の様態については、大火前の明治32年の『改正函館港全図』から建物の位置を確認できる。大火の15日前に刊行の『最新函館案内』[54]には「元町」と「末広町」についてはそれぞれ次のような記述がある。

「海を抜いて高く山麓にあり今を去ること四百五十余年前河野加賀守政通の築館[55]を始めとなし明治元年四月函館裁判所同年閏四月函館府を置かれし等明治十一年四月二十七日出火五十八戸災厄に罹りしも世々官衛及び学校寺院病院等の適当地として今は最も之等の家屋多く重なる営造物は函館支庁英国領事館等」

「末広町と改む当町は函館区に於て東京の銀座通りとも云うべく最も繁盛の地にて大厦高楼甍を列ね商店としては卸売の豪商多く銀行諸会社あり」

写真16　基坂を見下ろす・日銀（右端）・税関（正面）

以上示されたように、基坂上は「元町」とよばれ、江戸時代は函館奉行所が置かれ、明治期までは政治の中心であった。一方基坂の下は「末広町」であり、明治期経済の中心地であった。この二つの町を結び貫く道が基坂通であり、この道を中心軸にして、大火までの函館の市街地は形成されていた。

前記の火災前と火災後の２つの地図に記載された建物を照合すれば、大火前にあった町会所（富岡町）と女子高等小学校（元町）が大火後にはなくなり、女子高等小学校のあった場所に区公会堂が建設されていた。けれど、それ以外はほぼ同一に近い様態で各建物が再建されていたことが判明する。すなわち函館の中心軸であった基坂界隈では大火を契機とした都市計画的なレベルでの改良や進展がなされず、大幅な都市施設の刷新もなかった。大火直後の新聞紙面ではこの時期には「函館は現今に於て同市街の発達其頂点を過ぎ居りしもの」[56]という見方も現れていた。このことは都市の勢いのベクトルが東部に向かい、この時点で中心だった西部地区が固定しつつあることを予見していたと思われる。ここに明治40（1907）年大火の復興事業の性格の一端が現れ出ていた。さらにそのことは、この界隈の景観が大火直後に形成されたまま、この百年間大きな変化をしていないことと連関する。

3-5　国際都市の様態

もうひとつの函館の特質だった国際都市という観点で復興をみれば、大火で焼失した英国領事館やロシア領事館、領事館的な役割を担った中華会館が数年のうちに再建築されていた事実がある。このことからも大火以降も函館が依然として国際都市であったことが伺える。しかもこの３つの建物はいずれもが半永久と考えられていた煉瓦造を採択しており、この時点では函館に繁栄の黄昏が訪れるとは予想も付かなかったのだろう。領事館の閉鎖は大正８（1919）年のアメリカ領事館を嚆矢とし、昭和９（1934）年の英国領事館、昭和19（1944）年のソ連領事館と続く。

函館の居留外国人数[57]をみると、そのピークは331人を数えた昭和５（1930）年であるが、英国人やアメリカ人、フランス人については明治30年代が最も多く、ロシア人は亡命者が急増した大正後期から昭和一桁代が多い。これらの数値も函館が明治後期に最も国際色豊かな都市であったことを伝える。

3-6　建築技術者

大火の度に函館には多くの大工棟梁、職人などの建築関係者が全国から集まることになる。明治40（1907）年の大火の頃は次のような様相を呈していたようだ。

「この頃の函館は、西洋文化がせきを切ったように流れ込む、国内でも数少ない近代都市として発展途上にあったし、もちろん北海道では他の追従を許さない大都市であった。建設工事は夜を日についで行われ、街は活況を呈していた。噂を聞き伝え全国から人々が集まり、腕の立つ職人、工匠たちも続々と海を渡って来ていた」[58]

函館の建築についての得難い史料がある。『函館市史史料集』の一冊としてまとめられた村田専三郎[59]による『函館建築工匠小伝』[60]である。大工棟梁を中心に、設計者、木彫師、建具屋、左官、石工なども含めた105人の技術者についての名鑑であり、略歴と手掛けた主要建築が記されており、ここからは当時の函館建築界の様子が一望できる。

結

1）函館は明治40（1907）年の大火で市街地の過半を焼失するが、数年間で復興する。その主な事由は、その時期、函館は全国有数の大都市として栄え、財力があった点、また北海道への入口としての交通要港だけではなく、各国の領事館が並ぶ国際都市でもあって、横浜・神戸・長崎と並んだ港湾都市だった。

2）火災の事由は、第一が市街地が強風に晒される地形にある点、第二は木造という家屋の構造と材料の点、第三は市民に永住の観念がなかった点を指摘した。

3）函館は民間主導型の町であったために、主だった公共建築は富豪の寄附によって建設されていた。そのことは大火前の明治初期からおこなわれており、大火後も継続される。そのことを反映して、函館の建物の設計が在野建築家によって担われていたことが確認された。

4）大火以前の建築の様態を観察し、大火以降にどのように変わったのかを検証した。大火までは外壁は下見板貼であったが、以降は木骨漆喰塗りが出現する。大火前はほとんどが木造だったが、大火後には煉瓦造が増える。煉瓦造の寺院だけではなく、全国でも珍しく鉄筋コンクリート造の寺院が誕生する。

5）大火前の建築として函館区役所と函館病院、大火以降の建築として函館区公会堂と帝国博品館を建築的に分析した。また函館の中心地である基坂通の大火前と大火後の建築様態を比較し、この一帯が観光資源となっていった事由と関連づけた。

6）大火の度に函館には多くの大工棟梁、職人などの建築関係者が全国から集まった。

出典

写真1、2、3、4、5、6、7、8、9、12、13、16、ならびに図1、2、3、4、は函館市中央図書館所蔵、写真14は『最新函館案内』、写真10、11、15は『ふるさとの想いで写真集明治大正昭和函館』による。

謝辞

函館市図書館の奥野進氏には史料提供など大変お世話になりました。紙面を借りて謝意を表します。

註

1　宇杉和夫「意味論的都市空間構成の方法とその事例に関する研究・景観都市函館の構成・近代への移行時における意味構造の継承・置換について」『学術講演梗概集』日本建築学会．2000

2　井原辰五郎『最新函館案内』小島大盛堂（函館市地蔵町）．1907．p18

3　修道院であり、カトリックの巡礼地のひとつ、世界遺産に登録される。
4　函館市出身の小説家．佐藤泰志が1991年に集英社より刊行した小説を映画化したもの。
5　函館育ちの辻仁成の小説で、1997年に第116回芥川賞受賞
6　『重要文化財旧函館区公会堂保存修理工事報告書』文化財建造物保存技術協会．函館市．1983
7　明治初期については遠藤明久や前野堯による研究、明治中期については越野武・角幸博らの研究がある。
8　『論集』第56巻．２号．神戸女学院大学研究所．2010
9　「明治40年函館区統計」による。『函館市史統計史料編』函館市．1987．に収載
10　「先月来新聞雑誌に出でたる建築に関係或る事項一束」『建築雑誌』第249巻．建築学会．1907
11　函館消防本部から昭和12年に刊行
12　伊藤生「北海道観・裏面の函館（下）」『時事新報』大正５年５月27日
13　編集者、歌人で、啄木より９歳年長
14　明治・大正期は官僚、昭和戦前期には実業家となる人物で、文久３（1863）年生まれ、北海道庁参事官時代に北海道にいた。その時に「北海道小学読本」を編集している。その後旅順工科大学の前身の旅順工科学堂初代学長、栃木県知事を歴任し、実業界に転身し、八幡製鉄所長官、日本郵船社長を歴任する。
15　「先月来新聞雑誌に出でたる建築に関係或る事項一束」『建築雑誌』第249巻．建築学会．1907
16　伊藤生「北海道観・裏面の函館（下）」『時事新報』大正５年５月27日
17　「北海道の町並みの景観」『道南の槌音函館建設業界史』函館建設業協会．1982
18　元町公園に銅像がある。
19　神山茂『相馬哲平伝』相馬報恩会．1961
20　『函館市史統計史料編』函館市．1987
21　『目で見る函館のうつりかわり』函館市．1972
22　玉井哲雄「函館の公共建築」『函館市史都市・住文化編』函館市．1995．p109
23　当初は私立学校として創立され、明治16年に函館県立学校、明治21年には官立となり、昭和10年に廃校となる。
24　根本直樹「市史余話89和洋折衷建物のはじまり明治20年代後半から増加」『市政はこだて』第625号．1991
25　次節に詳述する。
26　前掲２と同じ。井原辰五郎『最新函館案内』小島大盛堂（函館市地蔵町）．1907．p62
27　函館市立中央図書館所蔵
28　前掲16と同じ「北海道の町並みの景観」
29　国立国会図書館蔵
30　村田専三郎「函館建築工匠小伝」『函館市史史料集』第31集．函館市．1956．に詳しい。
31　前掲30と同じ。「函館建築工匠小伝」
32　越野武・角幸博・池城正樹「開拓使函館支庁の営繕組織について」『日本建築学会大会学術梗概集』日本建築学会．1988
33　『函館市史都市・住文化編』函館市．1995．p58
34　『富の函館』富の函館社．1912．p96
35　『函館市誌』函館日日新聞社．1935．p238、『函館市史年表編』函館市．2007．p292
36　『富の函館』富の函館社．1912．p16
37　伊藤生「北海道観・裏面の函館（下）」『時事新報』大正５年５月27日
38　大正昭和期に函館を拠点に活躍した郷土史の研究家で、函館市史編さん委員をつとめた。『函館教育史年表』を嚆矢にして、46集に亙る『函館市史資料集』など、数多くの郷土に関する著作がある。明治26年１月15日、函館区東川町に生まれ、明治45年３月、札幌師範学校第２部を卒業し、弥生小学校訓導をつとめた。昭和40年11月７日に死去。

39 「将来の函館」『道南報知』昭和36年１月１日、『神山茂著作集』第二集．神山茂著作集刊行会．2004．に収載

40 初代聖堂は万延元（1860）年に完成したもので、47年間この地にあった。

41 西本願寺函館別院で、欧米の教会堂の形態の影響が強い洋風意匠であった。

42 前掲８の「耐火都市の建築思想１－鉄筋コンクリート建築の先駆都市・近代函館の位相」『論集』第56巻．２号で詳しく論じた。

43 『建築雑誌』第300巻．建築学会．1911

44 『富の函館』富の函館社．1912．p277

45 武田五一「近来東京市に建築せられつつある商館建築の型式に就て」『建築雑誌』第272巻．建築学会．1909

46 建築家．三橋四郎が外壁材として開発したもので、鉄網を芯としてコンクリートを鏝で塗りつけるもの。内部は木骨となる。

47 鹿野忠平『改正函館港全図』小島大盛堂．1899．函館市立中央図書館所蔵

48 『道南の槌音函館建設業界史』函館建設業協会．1982．p122、によると、この時期は北海道庁土木部に在職。

49 田中政治『新訂勧工場考』田中経営研究所．2003

50 伊藤為吉の設計施工で、「勧工場新築」『建築雑誌』第153巻．建築学会．1899．p235に記載有り

51 地理研究会編『最新／／函館市街全図』近江堂書房．1911．函館市立中央図書館所蔵

52 前掲２と同じ。井原辰五郎『最新函館案内』1907．p86

53 須藤隆仙『ふるさとの想いで写真集明治大正昭和函館』国書刊行会．1978．p5

54 前掲２と同じ。井原辰五郎『最新函館案内』1907

55 道南12館のひとつ「箱館」のこと

56 『北海タイムス』明治40年９月８日

57 『函館市史統計史料編』函館市．1987．p103～104

58 『道南の槌音函館建設業界史』函館建設業協会．1982．p73

59 大正10（1921）年に函館に来函し、函館工業学校教諭となる。函館最初の建築史家であり、またリアルタイムで目撃し、あるいは当事者として向かいあっていた。当然聞き書きということも多かったと考えられる。盛岡市出身で、東京高等工業学校建築科を大正５年に卒業。

60 前掲30と同じ。「函館建築工匠小伝」

（原稿受理　2011年２月25日）